

# 水面に画家は 何を見たか？

永井潔の風景画について、絵画修復家の山領まり氏はかつて、「その風景の中を歩けるような気がする」と評しました（当館撮影の動画より）。それは、写実的であるという以上に、まるで画家の隣で同じ陽射しを浴び、同じ風に吹かれているような体感を呼び起こされるからではないでしょうか。画中には、その眺めを前にした画家の思いさえ記憶されているのかもしれませんが。

今回は、そんな永井の風景画の中から、水辺を描いた作品を34点選び、展示します。



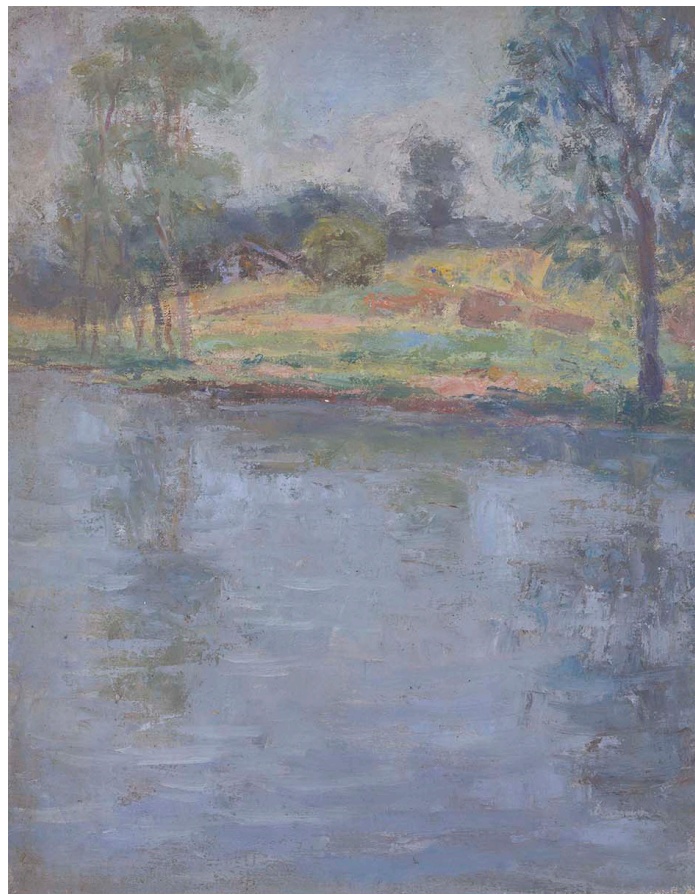
寺泊海岸

**海**を描いた作品は18点。『寺泊海岸』（1939年/油彩）は戦時下、兵役の合間に描いたもので、砕け散る波しぶきが時代に翻弄される青年の心を象徴しているかのようです。『網代港』（1968～9年頃/水彩）、『土肥の海辺』（1991年/油彩）、『海辺の家』（制作年不明/油彩）からは、洋々と広がる海のもとにつましく立つ家々や漁船が、その地に生きる人々の暮らしを想起させます。『ゴミを選る人々』（1960年/油彩）は、横須賀湾に面したゴミ捨て場に通って描いた異色作で、高度成長期を支えた人々の働く姿が印象的。ほかにも、伊根、房総、佐渡の風景など、海に寄り添う人々の営みに向けた画家の視線がやわらかです。

**川**を描いた作品は10点。『川べりの工場』（制作年不明/油彩）、『船と工場』（同）は、町工場と地元の水の密接な関係を物語ります。住宅街の川と民家ののどかな共生をとらえた『川べりの木立』（同）、コンクリートに囲まれた『堀割のある風景』（1969～70年頃/油彩）からは、失われた自然を惜しむ眼

第10回企画展

# 「水辺の記憶」



水面に映る木立

差しも感じられます。ほかにも、12歳で描いた八木ヶ鼻・五十嵐川の絶景、氷見の上庄川、下津井を流れる川など、各地の姿を映し込む川に永井は絵心をかきたてられたようです。

## 池、湖、水田

を描いた作品は6点。涼感漂う『石神井公園三宝寺池』（1960年/水彩）、『水辺の東屋』（制作年不明/水彩）、どこか微笑ましい『秩父の魚つり』（同）、『下野風景』（1986年/水彩）の水の恵み、『The water side』（1972年/リトグラフ）の春まだ浅いクールな水面。そして、『水面に映る木立』（制作年不明/油彩）は絵の大半が水面という、

まさに「水面」そのものを描く試みだったと言えるでしょう。

さざ波に揺れながら逆さまに映り込む現実の虚像——「反映」を描くことは、永井潔が生涯魅せられ続けた画題でした。そんな彼の思いが宿る「水辺の記憶」の数々をどうぞお楽しみください。

## □永井潔とアトリエ館□

永井潔（1916～2008）は画家として、理論家として、また多様性を認め合う美術運動の実践家として歩み続けました。画家としては一貫してリアリズムを追究、その根底には「かげかえのない存在」に肉薄したいという生涯の課題があり、それが色価（しきか＝色の明度、彩度の対比、相互関係）についての研鑽を深めさせました。理論家としては反映論を主体とした芸術論を展開、『反映と創造』（1981/新日本出版社）、『美と芸術の理論』（2004/光陽出版社）、『真理について』（2018/光陽出版社/没後出版）など十数冊の著書があります。「永井潔アトリエ館」は彼の絵画、著書に親しんでいたとうとう、2017年、長女の永井愛（劇作家・演出家・二兎社主宰）を館長にオープン。これまで9回の企画展を開催しています。

下野風景



# 永井潔アトリエ館

www.nagaikiyoshi-atelier.com ※2月・8月、年末年始は休館

〒179-0085 東京都練馬区早宮4-6-5 TEL.03-3991-9889  
東京メトロ有楽町線・副都心線「平和台」下車徒歩9分 都営大江戸線「練馬春日町」下車徒歩13分



館内 et café

絵のあるカフェ ラストオーダー16:00

展示作品とともに、カフェごはんもお楽しみください。

同時開催 永井潔 挿絵原画展

ケストナー「飛ぶ教室」

(1967年/僅成社)